

# いのちの水

二〇一六年

九月号

六六七号

悪をもって悪に報いてはならない。かえって祝福を祈れ。あなた方は祝福を受け継ぐために呼び出されたのである。(ペテロ3の9より)

と思いをめぐらす。

## 祈りと神の聖なる道

も、それらを通しての静かな

細い語りかけがある。

それらに聞こうとすることも祈りである。

また、聖書に記されている数千年前からの歴史や世界の各地で生じてきた歴史、また

身近な自分が幼いときから現在までの歩みのこと、身近な人たちのこと―等々、神は私

たちがつねに祈りをもって生きるようにと導かれているのを感じる。

聖書には、マルタの姉妹であるマリアが、じつと主イエ

スのもとに座って耳を傾けて聞き続けたことが記されている。(ルカ10の38〜42)

私たちも、内外に存在するさまざまなできごとにおいて、

神はそうしたことを通して何を語りかけておられるのか―

と

私

聖書には、さまざまの箇所において、あらゆるこの世の問題の根底に、神の聖なる道が御国へと通じていることが記されている。

私たちは、日常のさまざまの時に静まって祈るとき、そうした道がはるかに続いていくのをほのかに実感することができる。

：私は主の御業を思い続けいにしえに、あなたのなさった奇跡を思い続けあなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら

あなたの御業を思いめぐらす。神よ、あなたの聖なる道を思えば

あなたのようにすぐれた神はあるだろうか。(詩篇77の12〜14)

## 主に結ばれて歩む

私たちは日々、どこかに向って歩いている。

## 目次

- ・ 祈りと神の聖なる道 1
- ・ 主に結ばれて歩む 1
- ・ 主の祈り(その1) 6
- ・ 主が建てるのでなければ 7
- ・ 7月の北海道ほか各地での集会 9
- ・ 5月の無教会全国集会の閉会集会での各地からの感想 15
- ・ ことば 19
- ・ 編集だより 21
- ・ お知らせ
- ・ 集案案内



どこから来て、どこへ行くのかーこれはこの世界の根本問題である。

古代から、現代を経て未来へーいったいわれわれの未来はどうなるのか、このことに関して多数の人は、漠然とした不安があるのではないか。

我々一人一人は、まずどこへ行きつつあるのか、死に向っているが、死のあなたには何があるのかー。このことは老年になるにつれて大きくふくらんでくる。

他方、この社会、世界を見る  
とき、テロは、原発は、科学技術の未来は、核戦争はあるのか、人口の増大や資源の枯渇ーさまざまのものが自動化されていくなかで、人間は器械に使われるのではないのか、性の問題の乱れ、人間やその他の生物の遺伝子ーDNAを組み換えることなどによって何が生じるのか、その行き着く先は何が待っているのかー等々。

そして、科学の説くところは、最終的に地球そのものは、太陽の消滅とともに失われていく。

このような科学的な説明で人間の魂は深いところで満足できるであろうか。一切は消滅していくーそんな結論にいたいだけ満足できるであろう。

こうした自分という人間からはじまって日本や世界、そして宇宙にかかわる問題を考えるとき、どこに向っていくのかという問題は、だれにも解決のできない大きなものを含んでいる。こうした謎と不安に満ちたような世界について、どこにも確たる道がないようにみえる。

そのような中であって、聖書は、一貫してあらゆるそうした個人の未来のこと、世界や宇宙の将来についても深遠な洞察をもっているのに気付かされる。

いかなる闇や混乱があろう

とも、そこに大路があるー揺るぎない道があるというのが聖書のメッセージである。

そこに大路があり、その道は聖なる道となえられる。

(イザヤ書35の8)

And a highway will be there; it will be called the Way of Holiness.

イザヤと言われる預言者は、すでにいまから2500年以上も昔に、この世界のあらゆるまちがった道、汚れた道、あるいは滅びへの道とはまったく異なる道ー聖なる大路が存在することを示されていた。

これは、この預言が言われた時代においては、長く捕囚となっていた民が、だれもが予想もしなかったペルシャの王による解放がなされ、はるか彼方の祖国まで帰ることが許可されたことがもとにある。

砂漠地帯の困難で危険な道であつても、そこに神が備えられた道がある、必ず守られて

神の約束の地、祖国へ帰ることができるといふことの預言であつた。

そして、聖書に記されていることは、当時の世界や人々だけにあてはまるのでなく、どの時代にもどんな地域や民族にあつても霊的にはあてはまることが言われている。

それゆえに、この聖なる大路に関する言葉も、長い歴史の中で一貫して、その時代の人たちに自分たちのことが言われていると実感するものがあつた。

旧約聖書は新約のキリストを指し示す。ここでも、現在の世界の闇の力に苦しむ私たちではあるが、そのただ中に、私たちの祖国ー天の国へと帰っていく道が、備えられているといふことを指し示している。

そしてこの聖なる道は、その本質ゆえにいかなるこの世の権力や軍勢力、病気や飢饉といった状況にあつてもなお壊れることも変質することもな

い。

そしてその道こそは、ひと言  
で言えばキリストである。

：わたしは道であり、真理で  
あり、命である。

(ヨハネ14の6)

一般的には、キリストとは、

隣人を愛せよなど、よい教え  
を説いた人、人の生きる道を  
説いた人だ、奇跡をしたり特  
別な能力があったが十字架で  
処刑されたーというように思  
われている。

けれども、聖書は、キリスト  
とは単に道を説いた人にとど  
まるのでなく、道そのものな  
のだと記している。

キリストを知ったら、この世  
界がいかに混乱して闇が深く  
たちこめていようと、その  
混乱と闇のただなかに聖なる  
道が永遠に向って続いている  
のが見えるということになる。  
そして、その道を歩くことが  
できる。それは道そのもので  
あるキリストに結ばれて歩い

ていくことである。

：私たちは、主キリスト・イ  
エスを受け入れたのだから、  
キリストに結ばれて(キリス  
トの内にあつて)歩みなさい。  
(コロサイ書2の6)

キリストに結ばれて生きるー  
これは、原語のギリシャ語の  
表現では、キリストの内にあつ  
て生きるということである。

それゆえ日本語訳も、「彼  
(キリスト)にあつて歩みな  
さい」(口語訳、新改訳など)  
と訳されているし、数十種類  
ある英訳もほとんどが、 walk  
journeyとなつている。

私たちは何かの内にあつて、  
また何かを内にもつて生きて  
いる。

ーこの世の考え方、この世のさ  
まざまの霊の内には生きていて、  
そのなかで歩いている。

また、人間の愛や憎しみ、妬  
み、あるいは、支配欲などの  
中に生きている。

この世の学業やスポーツ、会  
社などで、よい成績(業績)  
をあげるということを第一と  
する願いの中にあつて生きて  
いることが多い。

そうしたものがない場  
合、絶望のなかにあつて生き  
ている人たちもあるだろう。

それらすべてに異なるのが、  
キリストの内にあつて生きる、  
歩むということである。

それが少しでもできると、  
おのずから、他者のわるいと  
ころを責める気持ちも消えて  
いく。そして、キリストから  
力を得る。

：あなた方が私の内にとどまっ  
ていなさい。

そうすれば私はあなた方のう  
ちにとどまっています。

それによって豊かに実を結ぶ。  
(ヨハネ福音書15の4)

まず、キリストのうちにとど  
まっていようとするようにと  
言われている。そしてそのた

めに、神はキリストと神との  
創造になる自然の豊かな世界  
を人間の周囲に置かれた。

青く広がる大空や雲、夜空の  
星々、山野のうるわしい緑、  
さまざまの植物とその花、海  
の広大な青い広がりー等々す  
べてキリストの招きである。

「私が創造したこれらの内ー  
その清さ、力、自由、美ー等々  
のうちにとどまっていなさい」、  
という招きがそこにある。

そうした自然の世界に何らか  
の理由で触れることが困難に  
なった場合ー病気や失明ある  
いは何らかの環境によってそ  
れらがわからなくとも、それ  
らの自然の創造主である神や  
キリストの内にとどまろうと  
することはできる。

天地万物は、一般的には神の  
創造によるのであつてキリス  
トは創造とは関係がない、と  
いうように思われている。

しかし、聖書の啓示は、次  
の聖句のように、キリストは  
神と同質であり、永遠の昔か

ら神とともにあり、神であった。そしてそれゆえに、万物の創造者でもあったと記している。

…言は神であった。この言は、

初めに神と共にあった。万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかった。(ヨハネ福音書1章1-3)

「こ」で「言」とは、イエスとして地上に生まれる以前の霊的存在、神とともにあり神でもあったという永遠の存在を指している。

…御子(キリスト)は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によつて、御子のために造られました。

御子はすべてのものよりも先

におられ、すべてのものは御子によつて支えられています。

(コロサイ書1の14-17)

この箇所も先にあげたヨハネ福音書の冒頭の記述と本質的に同じことを言っている。

…神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によつて世界を創造されました。

御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであつて、万物を御自分の力ある言葉によつて支えておられます。(ヘブル書1の1-3)

「こ」のように、キリストは、イエスとして人間の子供として生まれる前からおられ、万物の創造者でもあり、現在も万物を支えていると言われている。

「こ」のようなことは、科学的研究とか思索によつて導かれたことでない。まったくそれを超えた神からの直接の啓示としてヨハネやパウロ、ヘブル書の著者たちに与えられた

真理なのである。

そして神は愛であるから、その一人子でもあり、神でもあるキリストも愛である。

とすれば、万物はキリストの愛によつて創造され、今もその愛によつて支えられているということになる。

澄んだ青空―それはキリストの澄んだお心のひと雫である。それを見つめることによつて私たちはキリストの清い本質のうちにならざることもできる。

使徒パウロは、神の導きによつてつねにキリストの内にあつて生きていることが決定的に重要であること、彼自身の日々はそれによつてなされていたのがわかる。

それは、「キリスト(主)の内にあつて」(in Christ)という表現が、164回も使われているということからもうかがえる。

彼のなすこと、行なうこと、万事がキリストにあつて、靈なるキリストに包まれてなさ

れていたのであつた。(\*)

(\*) 例えば、コリント4の15-17では、4回もこの「キリストにあつて(主にあつて)」が用いられている。日本語訳では異なる訳語が用いられているのことに気付かない。

「こ」のような絶大な存在がキリストである。そのキリストのうちには私たちがとどまろうとするとき、たしかにその願いはかなえられる。

そして今度は、そのキリストが私たちのうちに居てくださるようになるという。

互いに、内に住むという驚くべきことが約束されているのである。

人間は著しく小さく、弱く罪深い。正しいこともできず、真実の愛なども持っていない。自分中心であつて少しのことでも揺らいでしまう。そんな弱いもの、汚れたものがいかにしてキリストの内にいることができるであろうか。

私の内にとどまれーと言われ

た。そのしめくりとしてイエスは、「我が愛の内に留まれ」といわれた。

(ヨハネ福音書15の9)

汚れたものは、清いものの中にはいられない。しかし、神は愛であるゆえに、そのような本来なら滅ぼされてしまうようなものをも、その内に招き、主の内にいることを許してください。

それだけでも驚くべき恵みであるが、それだけでなく、この私たちの小さき心、狭く醜い心の中に来てくださるといふ。

このようなことは、旧約聖書にはまったく言われていなかった。神とはあまりにも遠く、聖なる御方であるゆえ、人間が近づくとときにはたちまち滅ぼされてしまうと信じられていた。

預言者イザヤのような人ですら、聖なる神をまのあたりにすることを許されたが、自分には滅ぼされてしまう」と叫ん

だし、キリストの弟子ペテロも、キリストが神と同質の御方だとわかったとき、思わず私から離れてください!と叫んだほどであった。

しかし、それでも、神は愛であるゆえに、私たちのうちに来て住んでくださるといふ。

キリストが私たちの内に住んでくださる―このことも、ヨハネによる福音書、ローマの信徒への手紙で強調されている。

： 生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。(ガラテヤ2の20)

このように、私たちの道とは、キリストの内に私たちがどまり、そしてキリストが私たちの内にキリストが住んでくださるといふ道である。

そうになると、私たちの内なるキリストが万事をしてくださるようになる。

キリストが私たちの内に生きる。

ておられる、働いてくださるならば、人への憎しみも自然と消えていくであろうし、さらにはそもそもそうした人間的な憎しみ自体が生じないという状況へと導かれるであろう。

使徒パウロがもっとも力をそいで書いた書がローマの信徒に宛てた手紙として残されているものである。これは、この世界全体に人間の罪が満ちていること、それゆえに救いが必要である。その救いのために、キリストが来てくださったって十字架にて死なれた。

その死は、私たちを救う力があり、それはただ信じるだけでその救いが与えられる。そして、罪の赦しというもつとも重要なことが与えられたとき、人はおのずからそれまでと違った道を歩みだす。キリストの内にとどまり、またキリストが私たちの内にとどまってくださって歩む道である。

そのときどのようなことが私たちの日々の目標となるか。それは、とくに新約聖書の多くの箇所で記されているが、ローマの信徒への手紙にも明確に記されている。(12章) それらを要約すると次のようになる。

兄弟愛をもって互いに愛する。  
霊(聖霊)に燃えて、主に仕える。  
希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈る。  
迫害する者、敵対する者のために祝福を祈る。  
だれに対しても悪に悪を返さず、  
悪に負けることなく、善をもって悪に勝つ。

このようなことを、私たちの人間的な決心とか生まれつき愛のようなもので実行しようとしてもできる人はいない。せいぜいごく短期間それに類

することができずにすぎない。

しかし、さきに述べたように、

聖霊なる主の内にとどまり続け、主が私たちのうちに留まり続けてくださるならば、こゝろが自然に可能となるゆえに主イエスは、最後の夕食の場であつて、あたかも遺言のように、繰り返し繰り返しこのことを教えた。(ヨハネによる福音書の15章)

それゆえに、パウロも「主にあつて」ということを164回という驚くほど多く用いたのであつた。霊なる主の内にも留まつてその力に包まれていたからこそ、彼は驚くべき多くのはたらきをなし、またここで言われているような愛と聖霊に燃えて働くこと、そしてあらゆる人々とくに敵対する人への祈りを続けていくことができた。

そしてそのことこそ、わずかの期間にキリストの福音が広範囲に伝わっていく原動力となつたのである。

### 主の祈り(その1)

天におられる私たちの父よ。

(マタイ福音書6の9)

祈りは数知れない祈り方、祈りの内容がある。苦しむ人、しかもその絶えがたい、死にたいと思つほどの苦しみにある人の祈り、また大きな願い、病のいやしとか長年の対立が和解できた、何十年と努力してきたその目標に達成できた、等々がかなえられたときに捧げる感謝の祈りもある。

大きな罪を犯して、他者の人生を取り返しのつかないほどに傷つけた、あるいは交通事故で誰かの命を奪つてしまつた、あるいは、深い罪の赦しを願う祈り、相手に深い傷を与えたそのいやしを願う祈り、等々、置かれた状況によつて祈りや願いは千差万別である。

神を信じてない人でも、祈らずにはいられなくなるような状況に置かれることがある。

子供がおもちゃをくださいと

いつて祈るようなものから、主イエスの最期のときの祈りのように、死に至る激しい苦しみをどうか除いてください、しかしあなたのご意志が成りますように！と血の汗をしたたらせつつなされる祈りもある。

そうしたあらゆる時代のいかなる状況にあつても、なお最も深くて広い祈り、どんな人にとつても、また今から何十年経とうとその祈りの内容がすたれることのないような祈りというものはあるだろうか。それが「主の祈り」といわれて、それは二千年の間、世界で最も高く、かつ深く、しかも広範な内容を含んでいる祈りとして重んじられてきた。それが「主の祈り」といわれる祈りである。

その祈りのはじめは、次のような呼びかけである。

天におられる私たちの父よ

このひと言、これだけでもさ

まざまの意味が含まれている。天にいると言われるが、そもそも天とはどこなのか。

人間世界が近づくとこのできない無限の高み、あるいは清さに満ちたところを象徴的に指している。それは霊的世界である。つぎのように言い換えられる。

私たちが決して汚したり壊したりできない無限の高みにある神様、ということである。

そのような人間とは隔絶した存在であり、天地万物を創造したという途方もない壮大な御方であるにもかかわらず、私たちがこの世界に生み出してくださつた、最も身近な家族―父にたとえられる御方であることが意味されている。

主イエスが地上にいられてから、神は人間にもつとも身近な存在となつた。それまでは、限りなく清いゆえに、人間の汚れた存在は見ることも触れることもできないと思つていた。

しかし、主イエスが親しく神

を、父と呼んでごく身近な存在であることをその呼称でもって示された。

旧約聖書の時代には、個人がこのように神のことを、お父様などと呼びかける例は記されていない。

日本においては、宇宙の創造主ではないさまざまのものが神とされている。信長や秀吉、あるいは戦死した数百万の間も神とされ、礼拝の対象となっているし、山や樹木、狐や狸、蛇、昔の神話に出てくる人物なども神とされているが、そのような神々がまつられている神社に行つて、お父様などと呼びかけて祈るといふのは聞いたことがない。

私たちが祈る対象である神様は、無限に高く遠い存在でありながら、私たちを生み出し、最も近い霊的存在でもある。そのことを祈るときにはいつも意識して祈ることが求められている。

限りなく遠い、にもかかわらず、何よりも近いのが神なの

である。

このことは、後に主イエスが十字架で処刑され、復活されて聖霊という目に見えない存在となられてからは、私たちの内にまできて住んでくださるようにさえなつて、限りなく近い存在とさえなつてくださった。

そのようなことも暗示しているのが、この主イエスの最初のひと言の祈りである。

## 主が建てるのでなければ

人は、だれでも何かを建てる、造り上げようとしている。それは友だち関係であつたり、強いスポーツチームであつたり、あるいは勉学、研究、さらに何らかの社会運動の組織、あるいは会社などさまざまの事業であつたりする。

そして、より規模が大きくなると、国家を建てようとする。戦前は、大東亜共栄圏という

ものを建てあげるため、八紘一宇などというスローガンを掲げて、太平洋戦争を始め、おびただしい犠牲者を出し、日本を破滅へと導くことになつた。

あるいは、ヒトラーも、ヨーロッパを自分の支配下となるような国を建てあげようとした。

こうした近年の状況だけでなく、はるか数千年の昔から、さまざまの民族は周囲を支配し、広大な帝国を建てようとして武力で戦ってきた。エジプト、アッシリア、バビロニア、アレクサンダーの帝国、ローマ帝国等々。

近年は、かつての大戦争を起さないうようにと、ヨーロッパを一つに建てようとするEUなどもそうした例である。

そうした人間の外側のことだけでなく、内面の世界においても、私たちは周囲のさまざまな批判や中傷、攻撃にあつても倒されないような強い心に建てあげようとすることも

たいていの人は考えたことがあると思われる。

そうしたすべての「造り上げる、建て上げる」ということに関して、一言で深い真理が語られている。

：主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなし。(詩篇127の1)

人間がどんなに武力や権力、あるいはお金の力で何かを造り上げて、時が来れば必ず壊れていく。それは先ほど触れた歴史上の大帝国もみな崩壊し、消滅していった。時間にはあらゆるものを振るい落とす。長い時間のうちには、必ず神の御手が働いていることが明らかになつていく。

現代に生きる私たちにとって、だれでも何らかの人間関係を建て上げようとしている。夫婦、親子、兄弟といった身近なところから、学校や職場、その他の人間関係など至ると

ころに、私たちは人間同士の関係が生じる。

そしてそれを少しでも良く建てようとする。しかし、いかに人間が努力しても、ふとしたことから壊れてしまおうということもしばしばである。親子や夫婦の間を造り上げようとしても、いかにしてもうまくいかず、長い年月にわたって壊れたまま修復できないということもある。

そして最も近いものー私たちの心そのものを強固なもの、真実なもの、愛に満ちたものに造りあげようーとしても、ある程度はできたと思っても、ふとしたことから、壊れているのに気付く。愛などまるでなかった、という事実に関心がされることもある。

また、知識や技術、訓練によって自分を他人より優れたものに造り上げたいというものは、たいて人が持っている願望である。しかし、そうしたことも、それが実現されていくと、

高ぶりというひそかな罪が芽を出してくることが多い。

聖書にも次のように記されている。

…知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。

(コリント8の1)

人間を本当に建てる、造り上げるのは、知識ではなく、神の愛である。

神の愛を知らないときには、母の愛が最も深いように言われることが多い。しかし、そもそも母のいない人もたくさんいるし、母によって捨てられた人、愛どころか苦しめられる人もいるからだれにでも経験できるものではない。

また、母親が苦しい病気や老年になって動けなくなれば自分のことで精一杯となって愛を誰かにそそぐということなどできなくなる。さらに、いざれ成長して考え方が異なるようになったり、遠く離れて暮らすようになるとその愛も

薄れていく。その愛は、当然のことながら、母親が死ねば終わる。

人間の愛は、このように一部の人、ある期間や条件のなかで存在するものであって、ふとしたことからたちまち変質し、消えてしまつ。

それゆえに、母の愛にかぎらず「人間の愛は、本当の愛(神の愛)の影にすぎない」(カール・ヒルティ)ーと言われるのである。

それに対して、神の愛は、無差別的であり、いかなる状況の人にも及ぶものであり、ある期間だけということがなく、死後も復活させてくださり、永遠にその愛に包まれる。

そのような無限の深みをもった愛であるゆえに、人間のこゝと、世界のことをも究極的に建て上げることができる。

それは、言い換えれば、主によって建てるーということである。

「主によって建てるのでなけ

れば、労苦も空しくなる」ーこの詩篇の言葉は、私たち一人一人の心の中から、日本や世界の長い歴史の動きの中で生じることまですべてを洞察したうえで言われている言葉だとして受け取ることができる。

神の言葉とは、そうしたものである。どんなことが生じても、いかに長い時間が過ぎても、決して変わることはない。

「天地は過ぎ去る。しかし私の言葉は変わることがない」と主イエスが言われた。

人間が建てようとしたものはみな最終的には崩れ落ちていく。私たちのからだも、いかに科学技術、医学や薬学によって病気をいやし、怪我を治しても、刻々と老齢化し、最後にはさまざまの体力の衰え、また病気などによって治らぬ状況となっていく。

壊れていくのである。私たちはそういう意味で、いかに造り上げようとしても、最終的



には、確実に崩れ落ちていく存在である。

そのような冷徹とした事実に対して、聖書の真理は、まったく異なることを指し示し、約束している。

それは、最終的には崩れ落ちて終わるのでなく、復活し、キリストの栄光のすがたと同じような永遠の霊的存在として造り上げられるというのである。

この現在見えている世界もまた、いかに建て直そうとしても不可能である。太陽も次第に膨張し、熱を最終的には失い、それ以前に地球は灼熱の世界と化してすべての生物は死に絶える。

それでも、聖書は、新しい天と地が天からくだってくるという、ふつうの常識では到底考えられないようなことが記されている。しかし、死んで骨になってしまった人間が復活する、そして神に等しいキリストの栄光と同じ姿に変えられるということもまた、一

般の常識的な考えからでは、考えられないようなことである。

それだけでなく、そもそも愛や真実の神、いまも生きて働いている神が存在する、ということ自体、見えるものしか信じない人たちにとつてはおよそ考えられないことである。しかし、私たちが信じる神は、文字通り全能の神であるゆえに、どのようなことも可能である。

こうした通常の経験や学問、常識などの一切を越えることを信じることができるようになるのが、また神の力であり、大いなる恵みである。

この世界ー人も地上世界も宇宙もー根本的に造り上げるものは何であるのか、それは今後とも人間の究極的な課題であり、それにこたえるのが聖書の真理なのである。

一千数百年も昔、預言者イザヤが、神からのメッセージとして告げたことは、いまもお、私たちに語りかけられて

いる。

…あなたは知らないのか、聞いたことはないのか。

主は、とこしえにいます神、地の果てに及ぶすべてのものの造り主。

倦むことなく、疲れることなく、その英知は究めがたい。

(イザヤ書40の28)

### 7月の北海道(瀬棚、札幌)、東北、関東、中部各地での集会の報告。

今年の7月に北海道の瀬棚地域での瀬棚聖書集会が終えてその後各地を訪問、集会の予定を書いていたので、かなりの長期にわたり、自動車での走行も長距離であったこともあり、幾人かの方々から、無事に帰ることができたのかと後で問い合わせさせて頂き方もあったので、やや詳しくそのことを書いてみます。

私が瀬棚をはじめ各地を訪ねることができたのは、ひとえに徳島の地元の集会の方々や各地の集会の方々の絶えざる祈りと援助によることであつたので、こうした集会も多くの方々との共同のはたらきだつたと感じます。

-----

7月12日から、31日まで、北海道の南西部の日本海側にある瀬棚という地域での3泊4日の瀬棚聖書集会に招かれて、聖書の中からのメッセージを語った。

瀬棚聖書集会は、今年で第43回。私が初めて瀬棚にて瀬棚聖書集会の担当者として行ったのは、2003年の7月。それから14回目となった。

13年の歳月、毎年一度であるが、私にとって未知の人たちであつた瀬棚の人たちが、霊的にも近く、その参加者のお心、信仰、仕事、ご家族のことなどもいろいろと知らされ、そこにはたらいている神

の力をも知らされてきた。

7月12日(火)夜8時から、舞鶴市ーとはいっても、市街中心部からは25キロほどあり、山中の小さい農村集落。

そこに愛農高校関係の方々が在住、農業に従事しておられる。そこで添田さん宅のすぐ近くにある集会所での集会。

添田さん夫妻や霜尾さん親族の方々、外部からの農業研修生も一人加わつての集り。このような山深い所での生活、農業は車の入らない時代ではどれほどかたいへんだっただろうと思われた。そしてその小集落でキリスト教信仰を維持していくこともまたさまざまの試練があつたであろうし、現在もあるだろうと推察される。そうしたなかで、主がここに愛農高校関係者に福音の種を蒔かれて育つて維持されてきたのを感じた。

その集りの世話をしてくださつて添田潤さん夫妻が、

愛農高校時代に教わつた教師が、いま瀬棚で酪農をさせている倉田健さんであり、まったく関わりないと思つていた舞鶴のその集りと瀬棚がつながつているのを知らされたことだつた。

○7月14日(木)ー17日(日)北海道瀬棚での第43回 瀬棚聖書集会。今年の主題は、「神に選ばれた者の使命」。このテーマに従つて、私は4回にわたつて聖書からのメッセージを語らせていただいた。三日目には、日本キリスト教団の利別教会の石橋隆広牧師もメッセージをされた。

瀬棚といつても大多数の方々には、不明な地域と思われる。北海道の日本海側の奥尻島の対岸にある地域で、私も2003年に初めて瀬棚聖書集会で聖書講話を依頼されたときには、瀬棚という地名も知らなかつた。それから13年、

毎年瀬棚に夏の3泊4日の聖書集会で毎年み言葉を語らせていただくことになり、今年で14回目になった。

この間、瀬棚の方々にもさまざまな変化があつた。新たな人が酪農に加わり、以前からの人が外国へと2011年の福島原発事故の関連でニュージーランドへと移住された方もあり、またこの聖書集会のプログラムに含まれる教会での主日礼拝の聖書講話がこの瀬棚聖書集会の講師が担当することになっているが、その教会の牧師の交代もあり、病気で来られなくなつた人、結婚したときはキリスト教信仰は知らなかつた幾人かの若い女性が、瀬棚での酪農の生活のなかで、信仰に触れてキリスト者となつていった方々。

長くこの瀬棚聖書集会の大きな支えとなつて来られた生出生正実夫妻も高齢となり、生出生真知子さんも食事の準備その他のお世話から離れることに

なつた。

毎回の聖書講話の後では、その講話に関係する内容に限つての全員の感話、さらに三日目の夜には、音楽と交流の集い、自由な信仰に関する感話の時もあつた。

毎年夏の瀬棚聖書集会では、日曜日には瀬棚聖書集会の講師が、日本キリスト教団の利別教会での説教も担当し、聖書集会の参加者も教会員たちとともに主日の礼拝をとにもするという方式で長く続けられてきた。

こうして、無教会の集りと教会の礼拝とが一つになつて長く継続されてきたのは、ほかではあまり耳にしないことであり、教会、無教会という枠にこだわらず、キリストへの信仰という点での一致があれば同じ兄弟姉妹としての交流が与えられることを実感してきた。

○7月18日(月)札幌交流

集会

私が瀬棚に参加するように  
なつてから、瀬棚聖書集会の  
終わつた翌日に札幌で、札幌  
交流集会が行なわれるように  
なつていた。それは、私ども  
徳島集会の視覚障がい者が、  
浦和キリスト集会に参加して  
いた中途失明の大塚寿雄さん  
との関わりが与えられ、大塚  
ご夫妻のお世話によつて札幌  
での集りがなされるようになった。  
はじめは徳島からの参加  
者と札幌聖書集会の方々との  
交流から始まつたが、瀬棚に  
参加した北海道外の方々、釧  
路や小樽、また札幌独立教会  
などからの参加者も加えられ、  
20数名のよき集りとして続  
けられている。北星学園理事  
長の大山綱夫氏が、数年前か  
ら参加され、韓国の慰安婦問  
題で脅迫を受けたことに関連  
して、さまざまの困難があつ  
たこと、またそれが多くの方々  
の支え、祈りなどにより、何  
とか乗り越えることができた

が、現在では、また別の難し  
い問題もあることを語られた。  
その後、岩見沢の教友宅を  
訪ね、高齢の方からいままで  
の信仰による歩みのことを聞  
かせていただいた。

○7月20日(水) 苫小牧で  
の集会。今年は、私の連絡が  
遅れたため、市民会館の予約  
ができず、大澤 恵美子さん  
宅での集会となつた。そのた  
めに参加者との距離が近くて、  
いつもよりも参加者一人一人  
のことがよりはつきりと感じ  
られた。去年まで参加されて  
いた苫小牧の集りの中心的な  
方であつた船澤澄子さんが召  
され、今年はその姿が見えず  
残念なことだつた。

何十年もまえに、堤道雄氏  
が瀬棚の講師として参加され  
ていたとき、ともに瀬棚に参  
加したという方もあり、ずつ  
と以前からの主の導きが今日  
まで続いていることを感じさ  
せられた。

○7月21日(木) 青森戸山  
教会にて。今までは青森市の  
岩谷さんのお家での集会だつ  
たが、今回は日本キリスト教  
団の韓国の女性が牧師をして  
おられる教会での集会となり、  
その牧師さんや教会関係の方々  
も一部参加された。

岩谷さんは、若き日に、濃  
硫酸を顔面に注がれるという  
たいへんな事故に遭われ、青  
森から東京のそうした皮膚の  
移植技術に優れているとされ  
た病院で長期にわたつて治療  
を受けた。数十回にわたる顔  
面の皮膚の手術は耐えがたい  
痛みと苦痛、将来への絶望感  
等々でこのような類の苦しみ  
が、いかほどのものであつた  
か、それは余人には想像しが  
たいものがある。

そうした人生を一転させら  
れた苦難のなかからキリスト  
教信仰を与えられ、その恐ろ  
しい試練の中を歩んでくるこ  
とができたのは主の力、その

主の力を信じる信仰と絶えざ  
る祈りによつたものだつた。

この日の集会には、「いの  
ちの水」誌の京都府の読者の  
方が青森在住の友人(教会や  
キリスト教会の集会には参加  
の経験はなかつた方)に、こ  
の日の集会のことを知らされ、  
その方がキリスト者の友人を  
伴つて参加されていた。

5月の徳島市で開催された  
無教会の全国集会に青森から  
参加された対馬さんは、19  
91年の徳島での最初の全国  
集会に参加されて、それ以後  
は遠いこともあり、ずつと関  
わりがない状態が続いていた。  
しかし、私が瀬棚集会の帰途、  
青森市の岩谷さんのところに  
て集会をさせていたたくこと  
になつて、岩谷さんがその対  
馬さんを招き、さらにその対  
馬さんが友人を同伴し、今回  
は、またキリスト教会の集会  
などは初めてという友人を誘つ  
て参加されていた。

老年になつて、初めてこの

ようないきさつを経てキリスト教の集會に参加された方々とくにそのような方や、今信仰的にも十分な確信が与えられていない方々にいっそうの上よりの祝福が与えられるようにと祈り願った。

○7月23日(土)午前は、山形県鶴岡市の佐藤宅での集會。参加者の鈴木さんは、奥様が以前に参加されていたが、病気で召されたあと、奥様に替わって参加されるようになった。鈴木さんは、大学の際にアヤマの研究をされたとのこと、その後農学の研究者となられたが、キリスト教のことは、若いときに触れてはいたが、キリスト者となるまでには至らなかったとのこと。

奥様が召された後に、佐藤さん宅での集會に参加されるようになり、そのときに、私がインターネットの「今日のみ言葉」で 私が撮影した山口県秋吉台高原のリンドウを取り上げたとき、そのリンドウ

を召された奥様の記念の墓碑に刻みたいとのことでは話があり、人によつていろいろなこと心が残るのだと思わされた。

参加者の一人、村上龍男さんは、鶴岡市の加茂水族館長を48年も勤めてこられ、その間に、閉館の可能性もあつたほど業績が傾いていたその水族館をV字回復させたことで知られている。そして発光クラゲ(オワンクラゲ)の研究でノーベル賞を受賞した下村脩(おさむ)さんが、その水族館に来られたこともあつた。

その村上さんが今回の集會にも参加して言われることには、自分はキリスト教独立学園を1958年に卒業して若いときからキリスト教を知らされていたが、キリスト教の真理に関してはなかなか分かんかった。ようやく近年になつて聖書の深い意味を知られるようになってきたと言われていた。

信仰にかかわることは、人間の計画や予想では計り知れないものがあり、主イエスも先の者が後になり、後の者が先になるーとも言われている。信仰の世界に、ベテランというようなものはない。

何十年の信仰生活を経ていても、なお誘惑はいつでもどこにでも存在して、そのために信仰の道から落ちていく人もいるし、私もそうした実例に接した。

聖書にも、例えばダビデに関して、多くの詩篇に記された彼の真実な信仰とは到底相いれないような重罪を犯したことが記されている。

ペテロも、すべてを捨てて、3年の間、主イエスに全面的に従い、その教えや奇跡を目の当たりにしてきたにもかかわらず、イエスが捕らえられたときには、あの男のことで全く知らないといふ激しく否定したこともあつた。

私たちはそうしたことから、信仰に早くから目覚めていた

としても、靈的にはいつも目を覚ましていなければならぬ。また今信仰を与えられていない人たちも、ひとたび神の御手が臨むときには、たちまち信仰に生きる人へと帰られることを思い、どんな人にも希望を持つて対するべきと知らされる。

○7月23日(土) その日の夜は、山形市での集會。今回初めて参加されたご夫妻のうち夫君は、車いすで参加された。発声もクリアではなくわかりにくい状態であつたけれども、そのような状況のもとで、会社を運営されているとのことであつた。奥様の特別な援助も受けつつ、神への信仰に支えられ、ご夫妻がともに歩まれているのだと感じた。北海道瀬棚の酪農家、野中正孝さんからの紹介で「いのちの水」誌を読まれるようになり、今回初めて山形の集會に参加された。

○7月24日(日)仙台での主日礼拝集会。田嶋さんご夫妻が、集会の連絡や会場などいろいろとお世話くださった。

ふだんは、別の集会を持っておられる方々も参加され、また、初めての若い方々も何人が参加があった。5月に徳島市で開催された無教会の全国集会でキリスト者としての証言をされた岐阜県の石原潔さんがその中で引用されていた、

ホイツチャーの詩集( )を訳された根本泉さんも参加されていてその訳詩集を下さった。

未知の方や、また意外なつながりのある方も参加され、神の言葉のもとに集められたことを主の導きと感謝だった。

(\*) 「雪に閉ざされて 冬の田園詩」(Snow-Bound: A Winter Idyll) 新教出版社。ホイツチャーは、クエーカーの詩人。奴隷解放のために力を尽くした。

○7月25日(月)福島県本宮市(もとみやし)での集会

(湯浅鉄郎氏が代表者)。集会場は、木造の落ちついた雰囲気、礼拝集会のための部屋としてとくに造られたこのことで、奥様はピアノの教師でもあるとのこと、オルガン、ピアノとも備えつけてそのいづれかで伴奏をしていただけなので、賛美もいっそううるおいのあるものとなった。

平日の午前なので、参加者は限定されるけれども、農業などに従事されていて仕事のだが時間休みをとって来られた方々もあった。自宅からかなりの距離を参加して下さった方もあり、1年に一度、み言葉を中心として交流が与えられることは主の恵みだった。

○7月26日(火)埼玉県で浦和キリスト集会主催での集会で語らせていただいた。この集会でも毎年訪れていると初めての参加者も見られるのが感謝であるし、また意外な方(埼玉での集会には、徳

島の教会所属のKさんがクリスマスやイースター特別集会には、私どものキリスト集会に参加されているが、その方が埼玉県におられる教友を紹介し、「いのちの水」誌読者となり、また私が浦和キリスト集会でお話させていただくときにも参加されるようになった。主宰者の関根義夫氏には、徳島聖書キリスト集会の私の前の代表であった杉友豊市(そまともよいち)さんの百歳記念の伝道集会に来ていただいたことがあった。徳島で開催された全国集会や四国集会には何度も講師として来ていただいたが、そうした交流から、前述の札幌の大塚さんとの交流につながり、札幌交流集会にもつながっていったのと思う。

○7月27日(水)東京八王子での集会。八王子市の中心にある東急スクエアというビル1階にあるサウンドルー

ムという防音設備のある20名余りの定員の集会室があり、そこで、いずみの森聖書集会の代表である永井さんのお世話で毎年集会がなされてきた。ここでも初めての方、また前日の浦和での集会に参加された方が、再度この集会にも参加された。真夏の暑い日中を、続けて参加していただいて感謝だった。私の願いは、主が私を用いて、神の言葉を少しでも語らせていただくことであり、人間の意見や考えはいくらでも議論となり、反論もあつて尽きないが、神の言葉はそうしたあらゆる人間の思いや解釈を越えて、その単純にして深遠な力をもつて世界を流れてきた。それが少しでも仲介できたらと願っている。

○7月28日(木)

山梨県南アルプス市の加茂悦爾さんが代表をしておられる集会であるが、長野県の野辺山地域の方々が参加できる

ようにと、数年前から私が山梨県を訪ねたときの集会は、長野県に近い山口さん宅でなされるようになった。今回は、その山口さんの娘さんが東京から休みをとって帰って来て、初めて参加され、讚美歌の伴奏をしてくださった。

以前は、山口さんご夫妻がリコーダーでの伴奏をしてくださったことがあって、そうした楽器を用いての伴奏があると賛美もいっそう翼を与えられたようになる。

加茂さんの奥様(昌子さん)は、「いのちの水」誌を40部近くも求められ、それをさらに、いろいろな方々に送付されている。それは、昌子さんのお母様が、「いのちの水」誌の前身の「はこ舟」(\*)といふ冊子をいろいろな方々に送付されていたことを引き継がれてなされている。

なぜ、徳島とは関わりなかった遠い山梨の方に「はこ舟」誌が送られることになったかについては、初めて南アルプ

又聖書集会を訪ねたとき、加茂昌子さんから直接に知らされたことだった。それは、徳島県庁に勤務していた方が、その後山梨県に転勤となった際に、徳島集会の「はこ舟」を昌子さんが受けとったことがきっかけとなったこと。その昌子さんが送付されている方が、5月の徳島での全国集会にも参加されることにもつながった。

(\*)「はこ舟」誌は 1956年に徳島聖書キリスト集会の有志によって始められたキリスト教の冊子で、2005年より、「いのちの水」と改題。「はこ舟」という名称のときの内容も、徳島聖書キリスト集会のホームページに、1999年の5月号から掲載されている。

○7月28日(木) 午前の集会が終わった後、そこから北へ70キロほど、標高1300m余りの野辺山高原を經由して小諸市に向った。倉石重造さん宅での集会。ご家族3人のほか、外部から参加した方々もおられた。初めてお会

いする方々であったが、主の言葉を中心とした集りは、どこであってもまた初対面の方々であっても、身近な方々という親しみが感じられた。そのうちの一人は、県外からの来訪者があるというので参加したが、ふつうの懇談会のようなものだと思っていたが、内容の重い時間だった、予想と違っていたが、参加してよかったですと言っていた。人の言葉は軽くてすぐに消え去ることが多いが、み言葉のその重さが参加者の心にとどまりますようにと願った。

○7月28日(木) 倉石宅での集会の後は、千曲市の閑聡宅にて夜の集会。関さんのご家族4人のほか、夜遅くなるにもかかわらず、25キロほど離れたところからの参加者もあつた。少数の集りであったが、その遠くからの参加者とは初めてみ言葉を通しての交流を与えられた。

○7月29日(金) 長野県の下伊那郡、松下宅での集会。暑い日中であつたが、ここでも初めての方も参加があり、そのような方々にみ言葉の力が働きますようにと願った。数年前、この集会に、松下さんの娘さん(真理子さん)ご夫妻が参加された。140kmもあるところから、初めて参加された真理子さんのご夫君(関 聡さん)がその参加をきっかけに信仰の転機が与えられ、自宅での集会や、積極的に各地の集会やキリスト教独立伝道会にも加わって新たな働きをなされるようになった。こうしたことは、聖霊のはたらき、という他はなく、神の不思議な導きのことを思わされる。

以上のほかに、個人的に訪問した方々もあり、主にある交流が与えられて感謝だった。使徒パウロが書いているように、顔と顔を合わせて会つたということによって双方に主が

働きかけてくださり、強めてくださるのを感じる。二人三人、主の名によって集まるどころには、主がいてくださり、特別な祝福を与えてくださることを改めて感じた。

今回は、行程を少し変更する必要があったため、従来千葉県での二カ所と岐阜県の山中の石原 潔さんのゴバルには訪問できなかったのは残念なことだった。また、予定していた個人的訪問もいくつかできなかった。

最初の舞鶴の山中にある集落の一部のキリスト者の集会にはじまり、岐阜県での教友訪問まで、徳島聖書キリスト集會の方々、そして各地の集會の方々等々、じつに多くの方々の準備と祈り、援助によって小さきながら言葉の種を蒔くということが可能となったのは、深い感謝だった。

(付記)山と植物

北海道の瀬棚聖書集會に招かれてから、帰日も各地の「いのちの水」誌の読者や、1991年の徳島での無教会のキリスト教全国集會で教友となった方々、その後の全国集會や各地の集會で知り合った方々を訪ねて、集會が与えられるようになった。

そして、旭川市の故荒川巖（青森のハンセン病療養所―松丘保養園の元園長）さんが高齢とそれに伴う病気のため、札幌交流集會に参加が難しくなつて、入院していた旭川市内の病院で小集會が与えられたこともあった。その後、施設に入られたあともその施設を訪ねることにになり、そこから車では1時間ほどで大雪山のふもとに行くことができるので、登る機会が与えられた。

荒川さんは徳島で開催された無教会の全国集會に参加され、それ以来、遠くにあつて折々に連絡くださっていた。そし

て札幌交流集會にも参加されるようになって再会の機会が与えられていた。荒川さんが旭川におられなかつたら、大雪山に行く機会もなかつたことを思い、主の導きの不思議を知らされる。

徳島聖書キリスト集會のホームページの巻頭に折々に用いている大雪山の高山植物は、そのときに登つて撮影したもの。

そうしたいきさつがもとにあり、今年も、大雪連峰の一つ、黒岳（標高1984メートル）に登ることができた。初めてこの大雪山に登つたのは、今から51年前の夏だった。ロープウェイなどもなく、重いテントや食糧など一切を背負つて5時間をかけて登り、さらにそこから主峰の旭岳（標高2291メートル）へ

と縦走、さらに天人峽へと山々を越えていったのを思いだす。あのと時の大雪山は、頂上からの縦走の山々のあちこち

に白雪をまとう高さ、透明な大気、澄んだ青空、うるわしい花々、黙してたたずむ樹木たち、溪流の心をうるおす流れ―等々、私にとつては半世紀を経て忘れがたいものとなっている。

その後、大学時代や卒業後も、時間など許されるときに各地の山々に登り、歩いた。山は、一とくに人のあまり見えない山々は「神の言葉」で満ちている。そこで神の言葉を受けとること、その自然のただなかを登り、歩くこと、それによって心身を新たにされて、以後の各地の集會に備えることができるようになった。

さらに、出会う高山植物を撮影して、そのようなところに行くことのできない大多数の方々に言葉とともに少しでも紹介し、書かれた神の言葉とともに、自然のなかにこめられた神の言葉を伝える伝道の一環とすることにもつながつ

ている。

具体的にはメールや印刷した「今日のみ言葉」につけて「野草と樹木たち」、また私が撮影した高山植物の写真をはがきとして用いるなどがそれである。

このような目的で時間や体力があるとき、しかも車である程度登れるというかぎられた条件の山に登り、歩くという恵みが与えられている。

### 無教会のキリスト教全国集会の閉会集会での各地からの感想

雑賀 光宏(奈良)

奈良県から参加をさせていただきました。世界遺産の法隆寺のある町、斑鳩町に住んでおります。この二日間参加をさせていただきました感想を述べさせていただきます。

私にとりまして賛美歌の言葉の意味の深さを改めて教え

ていただきました。

吉村先生の神の言葉によった希望の講話をお聞きいたしました。神の声は自然の中に満ちあふれている。見えているのに本質は見えない自分の罪を裁かれた思いでありました。

またお話が終わった後の「聖霊来たれり」の賛美、このとき吉村先生は手話によつて魂を込められた賛美をなさっておられたことを拝見いたしました。わたしは涙が出てまいりました。感動いたしました。

この二日間それぞれの方の証しをお聞きいたしました。この世の出来事の中から、この場で神の言葉として述べられていくことをひしひしと感じました。ほんとうにそれぞれの方の感動的なお話、また神が仰せなっていることを深く受け止めなければならぬと思いました。

この二日間の集会の運営、主として運営されてくださいました徳島の集会の方々のお

一人お一人がその場で機能を発揮して、祈りをもつて運営されていたことをほんとうにまじまじと見ま

して感動いたしました。この二日間ほんとうにありがとうございました。

大塚 寿雄 (北海道)

札幌聖書集会から参りました大塚です。今回は札幌から牧野夫人、それから我々夫婦の三人で出席させていただきました。

現在も私達の集会は高齢化が進んでいて、私達がいなくなるとどうなるだろうと、いろいろな心配がもたれませんが、こういう気持ちで一杯です。それに較べて、この四国の徳島の聖書キリスト集会は若々

しさというか、活動力といいますか、この様な大きな無教会の全国集会を開催して下さり非常にありがたく感謝しております。前回も出席したのですが、本当に皆さんのな

される動きを肌を感じながら、私達がその恵みを受けている事を強く感じました。

信仰は、一人一人の個人の救いがあるからで、私が救われなければこれはもう、何にもならない訳で、その為にこのような集会がなされたと、私の為にこのような集会がなされたという気持ちで今回出席させていただきました。

これから先、どれだけ出席できるかわかりませんが、札幌の地にありながらも小さな集会の中で、キリストを伝えていきたいと、この様に今日決意した所です。本当に皆様に感謝します。ありがとうございます。

大塚正子(北海道)

北海道から今年も三人で来られたということは、私にとつての大きな喜びでした。そして、私が回を重ね、徳島に来るたびに、また特に今回は身体中にしみこんでくるような、



何か新鮮なものを感じました。

たくさんの賛美、そして祈りの友の時間は、じかに皆さんとお顔を合わせて祈る大切さというものを、思う存分に受けさせていただきました。

そして、毎年、瀬棚から札幌に伝道に来てくださる吉村先生が、また7月に来られるので、どうぞ、ご都合のつく方は一度是非、北海道まで足を運んでください。また新鮮な体験ができるかと思えます。今回の新しい聖霊の風を北海道まで運びたいと思っております。

ありがとうございました。

山口 明美(山梨)

山梨県の南アルプス市聖書研究会から来ました山口明美です。二日間ほんとうにありがとうございました。徳島の皆様に感謝いたします。

私が二〇〇八年の徳島での無教会全国集會に参加する時に、吉村先生が「祈りは必ず

聞かれるから」という言葉を下さって、ほんとうにその時はうれしく、二〇〇八年にこちらに来ることができました。今回もいろいろ大変なことはあったのですが、徳島での全国集會ということでぜひ来たいという希望がかなえられて、来られたことをほんとうに感謝でございます。ありがとうございます。

そして「いのちの水」誌を送っていただいて、私たちは南アルプス集會でほんとうに命の水を徳島から流されて、私たちの南アルプスまで伝わってくる水が、その源流に今日来させていたいただいて、こうしてまた今日はペンテコステの日だということ、ほんとうに感謝でございます。

小館知子さんがお嬢さんのことを言っておりましたけれども、私も息子を亡くして、でも今日はみんな気持ちいいしょになっているような気がして、きっと小館さんのお嬢

さんも息子も去年亡くなった母も、みなさんのご家庭で亡くなった方たちも、今日みんな一緒にひとつの輪になっているのではないかと、いろいろな感情がこみ上げてまいりました。

朝の祈りにも出させていただいた時、何か川風がほんとうに聖霊の風のようにささやいているように若葉の中で感じたし、吉村先生が、聖書講話のはじめに、ご自宅で朝録音したウグイスの「ホーホケキョ」の声を、神の言葉の一つだと示されたこと、どなたか言っていた私のところではもうカツコウが鳴いております。

ほんとうに自然の声が神の御心であり、また最後にマタイ受難曲の話をしてくださった方、マタイ受難曲はほんとうにすばらしい。私は死ぬときはその曲で送っていただきたいと思っているほどです。そのようないろいろの内容は、心の

ごちそうをいただいたような思いでございます。感謝です。ありがとうございました。

山口 清三(山梨)

同じく山梨県から参りました山口清三と申します。今回は会場の都合で分科会はなく全体会だけというお話を伺ったのですが、全体会はお互いにお顔とお名前と一言のコメントを聞くことよって皆さんのお顔が記憶に残ります。とても素晴らしいことだと思います。

賛美のときも、講話、それから証し、いろんな場面で今日のテーマである「神の言葉」希望に生きる」というテーマが一貫して流れているような気がします。分科会でたとえば憲法の問題とか沖繩の問題とか教育の問題とか聞かなくとも、私たちは神さまの御言葉を学ぶことよって、キリスト者として社会問題に対してどのように対処したらよい

かということがはつきりしている気がします。

よいお土産ができました。ありがとうございます。

西澤 正文(静岡)

静岡県の清水区から来ました西澤と申します。今年は徳島での全国集会、何を期待して参加しようかと思いつきながら来たのですが、自己紹介でお話したように、「せっかく各地から集まるということとで多くの方々といろんな時間をとおして語り合いたい。」という思いでした。

それができたかという非常に充実したよい集いだったと思います。やはり年に一度のときですので、せっかく北海道から沖縄まで集いますので、いろんな機会をとらえてということと期待してまずけども、その通り非常に自由な時間があります、いろんな方と親しくお話しできたことがいばん私にとっては収穫でした。そして祈りの具体性、昨日

の夜の「祈りの友」の集会、あの時間に非常に具体的なドキツとするような事実を知りまして、やはり祈りはほんとうに具体的で、しかも顔を思い浮かべながら祈ることの大切さ、これを知りまして、迫力のある祈りの集いに参加しまして感激いたしました。

具体的な祈りはやはり愛、具体的だとはじめて身をもって教えられましたけれども、みなさんの顔そして思い、そういったものを身近に感じながら祈ることができて大変良かったと思います。

二日間をとおしまして、一番私が印象に残っているのは、十字架上のイエス。今まではどちらかと言えば横を向いて小走りをして通り過ぎてしまっただ自分の姿がありましたけれども、これからは十字架上のイエスをしっかり見て、そこから信仰生活を始めていかなければいけないということを示されました。本当にありがとうございました。

西澤 かず江(静岡)

静岡県から参りました西澤かず江です。二日間ほんとうにありがとうございます。ほんとうに感謝です。

講話の中では、自然の中で川のせせらぎとかでほんとうに気持ちホッとしたりとか、星を見たりすると心がぎよめられたりするというふうに感じましたけれども、それがほんとうに神さまからの恵みだったということを特に強く感じました。

証しの中では、ほんとうにづらい時ほど神さまはともに居て下さるといふうに感じました。

ほんとうにこの二日間ありがとうございました。皆さんに祈られていること、また集会の方によっても祈られていること、また自分も多く祈っていきたくと思っております。ありがとうございます。

岩田 堯(たかし)(愛知)

愛知県の豊橋聖書研究会か

ら来ました岩田と申します。

自己紹介でも申し上げましたように、切なる祈りをもつて参加させていただいたので、その祈り願い求めていた以上の霊の恵みをいただき、心から感謝しております。このすばらしい恵みに満ちた集会をご準備いただいた、そして運営していただいた徳島の皆さん、そしてその背後にある神さまの御手に心から感謝したいと思えます。

私は強く心に残った三つのことをお話ししたいと思えます。

一つは 神さまの御言葉の学びということですが、吉村先生が今日の講話でお話しくださったように、もちろん聖書の学びが中心になるわけですが、私たちが取り巻く自然あるいは身近で起こるいろんな出来事とおして、私たちは耳を澄まし心を澄まして神さまの細き御声に耳を傾けることが何よりも大切だということに改めて学ばさせ

ていただきました。

二つ目、これはもう前の方が触れられたことですが、賛美することの素晴らしさとその大切さということを身に沁みて感じました。私は非常に音楽音痴と言いますか、日頃の集会でも古い賛美歌のごく限られた賛美しかできてないわけですが、ほんとうに賛美する中で、何度か昨日今日思わず涙を流してしまいました。集会に持ち帰ってこの二日間で学んだことを日頃の集会の中で活かしていきたいと思えます。

三番目に、さまざまの障がいのある方あるいは心の悩み苦しみを持っておられる方がこの会の中心であったということ、これもこれからの集会の在り方に活かしていきたいと思えます。以上でございます。

〇次回開催地の挨拶

坂内宗男(神奈川)

坂内です。私は徳島の全国集会にはいつも参加しております。

一昨年にも参加しましたが、昨日から今日まで聖霊の溢れた集会に参加させていただき感謝しております。

私は次回の全国集会の責任者になっておりますので一言申し述べたいと思えます。何回が申していますが、東京近在で行えば次は他の色々な地域で行いたいと当初から計画を立てているのですが、最近ではなかなか実現が難しくなりました。そういう中で、徳島聖書キリスト集会の吉村さんが「良かったら私の方で」と引き受けてくださり大変ありがたいたいと思っております。

次回は、今まで千葉県の市川市で行っていましたが、とにかく東京近在で行う予定です。東京都は会場費が高く、会費を上げるかどうかいつも検討するので、もっと安い所がないかどうか今探しています。

す。皆様に東京へ来ていただける様、探していますので是非ご参加をよろしくお願い致します。

私が皆様の感想の中で申し上げましたが、このような無教会の中でも新しい風と言いますか、聖霊に満たされた集会は素晴らしいと思えます。

東京での全国集会においては、私達が行っているように、二日間信仰を共に学ぶと同時に現実問題にいかに対処するかという事を一人で考えるのではなく、皆で考えるということ、6つ、7つの分科会を設け、証言を通して学ぶということも大いに意味があると思えます。

無教会には、規定もございません、何もありませんけれども、広い心で、ふくよかな心で信仰を学び、地に足を付けて歩むということが大事だと思います。

そういう面で、他者の色々な考えを受容するという広い

心が必要だと思えます。

こちらは台風の事を考慮し、5月に開催されていますが、私達は来年の10月から11月に予定しておりますので是非来年足を運んでいただきたいと思えます。

### ことば



(396) 回心のとき

午前四時、床にあり。俄然として自得し、自ら30年の非を悟り、この自然の大法に意志あるを感じ、自ら新たな生涯に入りしことを知る。

希くは、この清き心をして、永遠に保たしめ給え。愛する神よ、アーメン。起きて田畔を歩す。

天地その形象を改め、星光赫然として神意を語るが如し。(井口喜源治(＊) 1899年)

・(これは100年以上昔の文なので、若い世代の人にもわかってもらえるように、説明的にその文意を以下に記す。)

午前四時に目覚め、床にいて

突然にして、過ぎ去った30年のまちがいを感じた。

自然のなかに存在する大いなる真理に、人間を超えた意志があるのを感じ、靈的に目覚めて新たな生涯に入ったことを知った。

「この清い心が永遠に保たれるように。愛する神よ、アーメン。」(そのようになしてください。)

その後、起きて田の畦道を歩いた。それまで何気なく見ていた天地が、その形を変えたように見え、星の光の輝きは、神のご意志を語っているようであった。

(\*) 井口喜源治 1870-1930 長野県安曇野出身。内村鑑三に深く影響を受けて、そのキリスト教信仰に基づく独自の教育を志し、私塾を建て、多くの反対、妨害などを受けつつ、その精神を貫いた。

神は、早朝まだ床にある間に、光を送り、彼が回心したのがうかがえる。それは同時に自分の罪を知り、自然の清い姿とその永遠の存在に目覚め、

とくに星の光に神の語りかけを感じるようになった。神の清き光は、罪を教え、自然の世界の清さを悟らせる。

(397) 神の愛の深さ、広さ

我々の神は、愛の神だ。お前は海のほとりに立っていくら石を投げ込んだところで、海の深みを満たすことができようか。

キリストの愛は、海のようなもので、石が深淵に沈むように、人間の罪は、その中に沈むと言いたいのだ。

また、キリストの愛は、山も陸も海も覆っている大空のようなもので、それは至るところに広がっていて、それには限界もないと言いたいのだ。(「クオ・ヴァディス」下巻235頁 岩波文庫)

・これはポーランドの作家、シエンケビッチの作品。戦前から映画化され、また彼は、ノーベル文学賞を受賞した。

・神の愛などどこにも存在しない、と感じている人たちが

至るところにいる。しかし、じつさいに神の愛を体験した者は、この作品に記されているような神の愛の無限の深さ、広さを感じてきた。

### 休憩室

#### 最近の星空

この頃(9月中旬頃)は、金星が宵の明星として6時くらいになると、金星の輝きは一層強くなります。また南の空(やや西寄り)には、火星の赤い輝きがあり、その右上のほうに土星があります。その土星の下方にやはり赤い輝きの巨星アンタレスも見えています。

去年の7月ころには、宵の明星も最も明るく見えていました。それから1年余り経って、ふたたび宵の明星が見えるようになっていきます。この宵の明星は、今後今年中は見えず、さらに来年の春の訪れを聞く頃まで見え続けます。

都会では、一般の恒星は見えにくく、一等星以外はほとんど見えないところが多い状態ですが、金星はさすがにその強い輝きのゆえに、都会でも見ることが出来ます。

金星の雲は、地球の雲と異なり、濃硫酸でできているとか、激しい風が吹いている、表面温度も470度を越えている。等々の科学的知見だけを考えると、およそ生物学的な生命とは無関係の星だと思われる。

しかし、そうした科学的な事実とは関係なく、その夜空の輝き、光そのものは、人間の魂に深く入ってきて、その人に新たな希望や命を与えるものとさえなりうるのです。

それは、ピアノなどの弦や鍵盤など、あるいはこおろぎの羽などの材質が何でできているかなどと関わりなく、そこから生み出される音そのものによって私たちの魂に届くのと同様です。

金星の輝きが特別なメッセー  
ジを与えてきたことは、聖書  
にも示されています。

とくに、明けの明星としての  
金星を、古代のキリスト者た  
ちは見詰め、それによってキ  
リストを思い、再び来られる  
キリストを見る思いで、迫害  
の厳しい時代に希望の光を与  
えるものとなったほどなので  
す。

： 夜が明け、明けの明星があ  
なたがたの心の中に昇るとき  
まで、暗い所に輝くともし火  
として、どうかこの預言の言  
葉に留意しててください。

(ペテロの19)

ここで言われている預言の言  
葉とは、神の言葉です。神の  
言葉をしっかりと持ち続ける  
ときには、キリストが再び来  
られるときまでそのみ言葉が  
灯(ともしび)となります。

悪の力が世を覆い、キリスト  
者たちも信仰をもっている  
というだけで、殺されたり拷問  
されるほどの闇の時代。

しかしその夜は必ず明ける。  
そのとき明けの明星が輝くよ  
うに、キリストはこの暗夜の  
世界に輝くー再臨される。

このように、明けの明星とし  
ての金星は、闇の力に苦しむ  
人たちを上げまし、やがて現  
れるキリストを指し示すもの  
として、倒れようとする心を  
強め、御国に向って前進させ  
る力となったのです。

そのことは、次のようにロー  
マ帝国の迫害の時代に書かれ  
た黙示録のなかで記されてい  
ることからもうかがえるので  
す。

： 勝利を得る者に、わたし  
は明けの明星を与える。

(黙示録2の28)

悪の力が世を覆っているとき、  
キリストを信じ続けていくこ  
と、それはそうした悪に勝利  
することであり、そこに明け  
の明星で表されるキリストが、  
闇夜に輝く強い光として与え  
られる。

それは再臨のキリストを意味  
するとともに、日々の生活に  
おいて闇の中であつてもキリ

ストの輝く光が与えられて歩  
んでいくことができるという  
約束となっています。

わたし、イエスは使いを遣わ  
し、諸教会のために以上のこ  
とをあなたがたに証した。  
わたしは、ダビデのひこばえ  
その一族、輝く明けの明星で  
ある。 (黙示録22の16)

### 編集だより

・ 5月に徳島市で開催された  
キリスト教(無教会)全国集  
会の、二日目、閉会集会での  
感想を掲載しました。

どのように感じつつ、この全  
国集会を終えたのか、率直な  
感想が話されました。

・ いろいろと書くべきことが  
あつても、時間がなくて書け  
ないという状況があります。  
多く書いたからといって主が  
用いてくださらなければ、何  
にもならない。他方、いかに  
短い分量であつても主の御手  
がそこに置かれて祝福される  
ときには、大きなメッセー  
ジとなります。

主が掲載した全国集会に關す  
る感想や、私の書いたつたな  
い文章をも用いてくださるよ  
うにと願うばかりです。

### 来信と感想より

： 私はいろいろな病気の  
ために教会や集会にも行くこ  
とができません。そのためこ  
れらの印刷物(「いのちの水」  
誌、集会だより、「今日のみ  
言葉」)などの印刷物を繰り  
返し拝読しています。(関東  
の方)

・ 「神は涙をことごとく拭つ  
てくださる」ー本当にその通  
りです。年をとると、この世  
の闇の深さに本当に驚くこと  
が多くあります。

そして神の御名、み言葉を思  
い、祈るものです。

「神がみずから人とともにい  
て、その神となり、人の目か  
ら涙を全くぬぐい去つてくだ  
さる。」(黙示録21の4)本  
当に何という、ありがたいこ  
とでしょう。

生きるということとは、思いが  
けない背信や悪意、数々の苦  
しみや悲しみに出会うことで  
もありませんが、それら一切が

ぬぐいさられる時が、来ると  
いうこと。

そうしたまことの喜びのおと  
ずれ、福音が語られ、届けら  
れているということー何とい  
うありがたいことでしょうか。  
(関西の方)

○「青は空の色、天の色であ  
り、つまり神様のおられると  
ころです。その天界の領域・  
神の霊の領域と、しっかりと  
結び、いつもそのことを忘  
れないようにしなさい、とい  
うことでしょうか」とのこと。  
なるほどーっと思つた。と  
ても納得がいった。

詩編第三十六編六節には  
「主よ、あなたの慈しみは天  
に、あなたの真実は大空に満  
ちている。」とある。

とても美しい箇所、吉村先  
生が「いのちの水」誌で以前  
引用されていて印象に残り、  
それ以来よく思い出す聖句で  
ある。秋の晴れ渡った空の青  
さを見ていると、それだけで  
幸せな、感謝の思いでいつぱ

いになる。なんとこの世界は  
美しく、主の慈しみに満ちて  
いるのだらう。

出エジプト記第二十四章十節  
には、神の足もとは「サファ  
イアの敷石」のようなものが  
あり、「大空のように澄んで  
いた」と記されている。また、  
ヨハネ黙示録第四章六節には、  
神の御座の前は「水晶に似た  
ガラスの海」のようだったと  
記されている。この青空は、  
何かしら、そうした神様のお  
られる場所の似姿なのと思  
う。(九州の方)

### お知らせ

○10月の吉村孝雄が聖書講話  
を担当する阪神地域での集会  
一、阪神エクレシア

・10月9日(日) 10時～12時  
・場所 兵庫県私学会館  
・問い合わせ 川端 紀子  
hichisan-toshisan@ezweb.ne.jp  
電話 078-578-1876

二、高槻聖書キリスト集会

・10月9日(日) 14時～16時  
・場所 高槻市塚原5-8-5  
那須宅 電話 0726-93-7174  
・n\_mymys@yahoo.co.jp

○近畿無教会集会の録音CD  
9月3(土)～4日(日)  
に京都で開催された、近畿地  
区無教会キリスト集会の録音  
CDの希望の方は、左記の吉  
村まで申してください。MP3  
版1枚です。価格は、200  
円(送料込)

○青年全国集会。

・日時：11月19日(土) 14時  
～20日(日) 13時。  
・主題：「人はなぜ生きるか」  
・会場 あつる京北(京都府  
立ゼミナールハウス)  
・参加費 9千円(宿泊・3  
食込み)

・対象年齢：50歳前後まで  
・申込：小館美彦(主催者)  
までEメール、電話、はがき。  
Eメール：ykodate@seagreen  
on.ne.jp 電話：0900-  
53388-3083  
締め切り：11月11日(金)

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目1の47  
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日午前10時30分  
(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7  
時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝は  
移動夕拝。(場所は、徳島市国府町の  
ちのさと作業所 吉野川市鴨島町の中川  
宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南  
町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて  
開催)です。

・水曜集会：第二水曜日午後一時から集  
会場にて。・北島集会：板野郡北島町の  
戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より)  
北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)

・天室堂集会：徳島市応神町の天室堂  
はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日  
午後8時)。

・海陽集会 海部郡海陽町の讚美堂・数  
度宅(第二火曜日午前10時より)。

・いのちのさと集会：徳島市国府町(毎  
月第一木曜日午後七時三十分より「いの  
ちのさと」作業所)。  
・藍住集会：第二  
月曜日の午前10時より板野郡藍住町の美  
容サロン・ルカ(笠原宅)。  
・小羊集会  
：徳島市南島田町の鈴木八里治療院にて。  
毎月第一月曜午後3時)。  
・つゆ草集会  
：毎月第4日曜日午後一時半)。  
徳島大  
学病院8階個室での集まり。  
・祈祷会が  
第一回金曜日午前10時30分)。  
・第四土  
曜日の午後二時からの手話と植物、聖書

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇二五 小松島市中田町字西山九一の二四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)  
郵便振替口座 〇一六三〇一五九五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は 郵便振替口座を定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。  
(いねらは、いずれも郵便局で扱っています) E-mail: pististy12@hotmail.com